1 5
1456
1

門15
號1456
卷1

今訪文冊

神原家中逸話　高田藩竹尾清全著

三上義書

早稲田大學図書館
明31.9.27受
藏書

二席

漢北條の歴代の史記あるといえ共稍くの行事天地の変怪国家の治乱等人事古今の治乱凡世の治乱に漏るの形しは是皆園よりいでおおよそ家にありて代ののくし謂ども固より市街商家よりやぬれども薫陶の家の齢をたもてるよ物語ともあそこ有しら年老ぬれて忘れるもの名目をうもおよそれるもよ後て思いも出ずまれども要なやかなるし角やかけんねと勝脇とし仕て句つくりくなれう家柱門高家し仕へしく今ありて深更食よ事二百有余の年暦を歴まして只貴賓離まつる而已行のあるを事なくんや茅屋よ賤

宝よおかえ志而も根くようけうす保うちまへあく録と
吐人をはうち之世のおくしい移ろ行年月よ志うろい保うくうち
名をたよもうろくしたおかんと情と思あうくうして是も文化
乃もくつをを捨つ而罰を保うけうる而

今や寛ゝ暦七ひのとの丑仲春

飯田町
岡松軒曉雲自叙

見聞随筆一之巻目録

一 御先祖御敬ふ事 一
一 神君ニ奉為御先祖ニ御呼給ふ事 二
一 小田原台痛寛物ニ事 二
一 寛永寄家中路御供ふ事 二ウ
一 関ヶ原御出陣ふ事 三
一 徳見路御通ふ事 四
一 台徳院殿ニ奉ニ御計ニ事 四
一 御牧陣撤書ふ事 五
一 芦原ニ御信康君御陣ふ言ふ事 六
一 会津ニ奉ニ向御延引ふ事 七

一 上杉御征伐御之陣し事
一 賀藩清正公朝鮮征伐之事
一 銘柄拾二品御所持之事
一 水之御秘硯御秘蔵之事
一 諸家ゟ御所望之事
一 第二品第一御宝物之事
一 御年寄衆ゟ御書之事
一 南蛮ゟ到来之事
一 村上御家ゟ小之御刀を献ぜし事
一 蒔絵御文庫之事

一 参年令御之御子供
一 山岸之儀也生捕
一 御勘当之事
一 御勘気長引之事
一 御勘当之事
一 賀藩清正公性質
一 銘柄拾弐品御所持之事
一 諸家ゟ御所望之事
一 御年寄衆ゟ御書之事
一 南蛮ゟ到来之事
一 御年寄衆ゟ御書之事

一 [illegible]

公ハ上京し日向守ニ逢ハ光秀を討んと有ける由の事
然ル上明智光秀か為ニ信長公生害有し旨ハ
皆々知る所也と早速日向守光秀ハ如何御討伐候ハ旨
見えす候ニ明智早速本城ニ籠りけれとも我手ニ取て追討
し早く討留せんとて是迄来る也先ツ治秀(?)身ニ無程ニ
妻子として諸家へ檄書せし処中ニて頼ゆる由を増ゆる也
従ふるは今家康を乞ひ縁者なる故ニ使ひ送られて今
め此討留まる事我か身の何にか先せんとの上意有て無
康公官まてハ本意なりすと待受樹下裏へ官位を
不受にて従ひ候ニ依て行者しとら部援なハ内府家
ニおゐてハ叙爵を無しる事一事も由申ス及ひし抱る公

之御行跡ハ御器量人ニ勝れ候之記録又口碑ニも有之て承記
有之候

一 遠州見付ニ宿本陣ニ而御台所物語ハ御先祖康政
公酒井ニ被仰渡候ハ先祖三河殿ニ御奉公
立寄候而仕候武田ノ旗本家有之候而酒井ニ言返
しを　神君御感有て討手小平太様ニ被仰付候追返し候
早速ニ被仰出候ニ付上ハ三河忠勝宅ニ而高寿利浅右衛門
申候而仕候様ニ御宿之御休息ニ上ノ間ニ而御申付ル
之儀是ハ先祖榊原家ニも今ハ知人ニ而候ニ付此節
可申聞候ニ付是京古今物語有之候物語可申し

一 小田原ニ而御陣ノ宿ニ而物之又ハ御尋ノ太閤御合戦之節

神君へも應殺之源九郎殿申田にて安(あ)く下之
まず御手前多補をけれは其身の御茶入御屏風御掛物成し
とけ見し可きなし讀書へも多補住々様し給ふ各傳し
成候と元の田家にも論す物の價へ来く分ハ多く八時付
の道を我をいかやうとなや

一 長篠御陣の節 神君ハ大久保新十郎少輔吉隆忍寄夷又
志ろうふ手次より石田治部少輔三成
居もふ者し様とくなる事御家へも成ろうも也吉隆に召
固し無二ノ知音なれは為めにつかあらんと方語こ并く御
用ゐ成遠けらさらんと思召家康公と御和談ニ有るま
て此時ハ宗の家老成田にて申合長殿紀伊守を毎
殺せし事に付吉隆後出来に及ふを刑部少輔と康政
公と御元様に立結ひ候様を継兼の種に付康政他
家へしおへよ只申へき様を段に御継程ま御取計しかやは
以て御申ちよ成るに康政公速成ゐるせしかって三成
吉隆へ御申家康ヶ様し存寄よ安心ハ上に摘み大名
持参成は上早速出立蒿伐よ羽柴中納言明日
御申付成候ゑ申ありし御取らるゝ成大名衆
家康公ニ召置心よりに於ても候よ諦達よ於て名
是ゐるし手御取継を出せらる手前を召置合御の御味
微よ謹居ともやかくけるるとハ世の人も忘ることも無き

一 関ヶ原御陣の節 台徳院様より結付上向く成る

一大岡と徹田信雄掛持ちとなり　神君尾州への使者
大山参詣の外見えず　小牧山の要害の人数召連れ
召連れた大岡より人数近く来て大山より廉
清閑を慮り遠く一歌大人数をして責なる使者の
殺心元和元年小牧より大坂へ御移の
御供平八郎と信州久々と最期を
設けた乃至御手者仕置
なき大切の場所不相応に御屋
彼あり所なを以て上意背き
付れを以て上意背き
何事も某より之段申上候
社人

土宇せらるゝ由にて、卒八帝度の勅を奉りて、
あまた勇命をは喊よて果しつゝ、其ほこ
りの花ひらくと吟く、勇ミ々ら、
いつれも〳〵不忘ふるをこと別の情ありてや、
有ん、俄よ結ぶとゝられ、別の歌ども、
まて今に忘ぬましの花あるて、別の
の勇気をとゝもよ〳〵すて、
知り給ふかゝるを吟くなん感しぬ古人の心ちあり
一前よりの陸奥かゝるに、当時二帝信康様、浮沈ありて
うゐ〳〵康綱云打ゝは異見ふ給ふ、
々ら或ず又の様ふ上、

新ら〳〵ことをとゝれ原股の手ふ
ふの様ふこの様ふおかしもの給ふ
股をの給ふ所の勇ふ、
可ふい文共よの種ふ水晶
の花ひ〳〵の如ふ、
の乳色も直ふ奥ふの
かゝ〳〵や給ふの勇ふ
一慶長六年上杉弾正
津の勇ふ而ふ白川ふ
ふし奈ふ〳〵ふ津毎ふ
ふふ公一旦ふの
毎ふ公一旦ふの進ふ

冒詩よ畠山重忠の先陣を
言伝ふ由

一
今津勘解由を召して仰付
詰る事共ニ付て　家康公退治を企
一軍勢を催し給ふ事
陳而ハ清須迄進ミ給ふ
評判して先上杉の退治
又ハ会津を攻給ハ
ハ給ふ　神君にも
御出馬ニ而ハ
神君も御ゆるの御心ゆく

次郎の論ニ曰て小山ニ
康公の軍ニ加り
言ハ先ハ清須
義ハ
公儀ニて
上方ニ
ニ候ハ
ニ候ハ
ニ候ハ
人ハ及ひ
用よめ
朝鮮征罰ニ

将又陣之事ニ付而ハ、御家中之面々ニ
被仰付之御馬役ハ、御領ニ而御練
馬ニ付而ハ、御扶持方ニ御加増
被成下候由ニ而、御領ニ而ハ
御加増無之候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役

一

関東御討入之節、家康公大御
よろこひ被成、御感状ニ
御加増之儀ハ、御領ニ而
御加増無之候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役

之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役

一

関東御討入之節、家康公大御
よろこひ被成、御感状ニ
御加増之儀ハ、御領ニ而
御加増無之候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役
之面々ハ、御扶持方ニ而
御暮被成候ニ付、御馬役

水尺ニ堀ヲ穿チ百万石御領ニ
就テ元来上宮ノ御
百姓ハ一切ヲ知ラズ毎年
ニ
御
ニ
ハ
館林近辺ハ新田地ヲ大ニ
多ク所務ヲ
ト
卯年経テ後御家中ニ

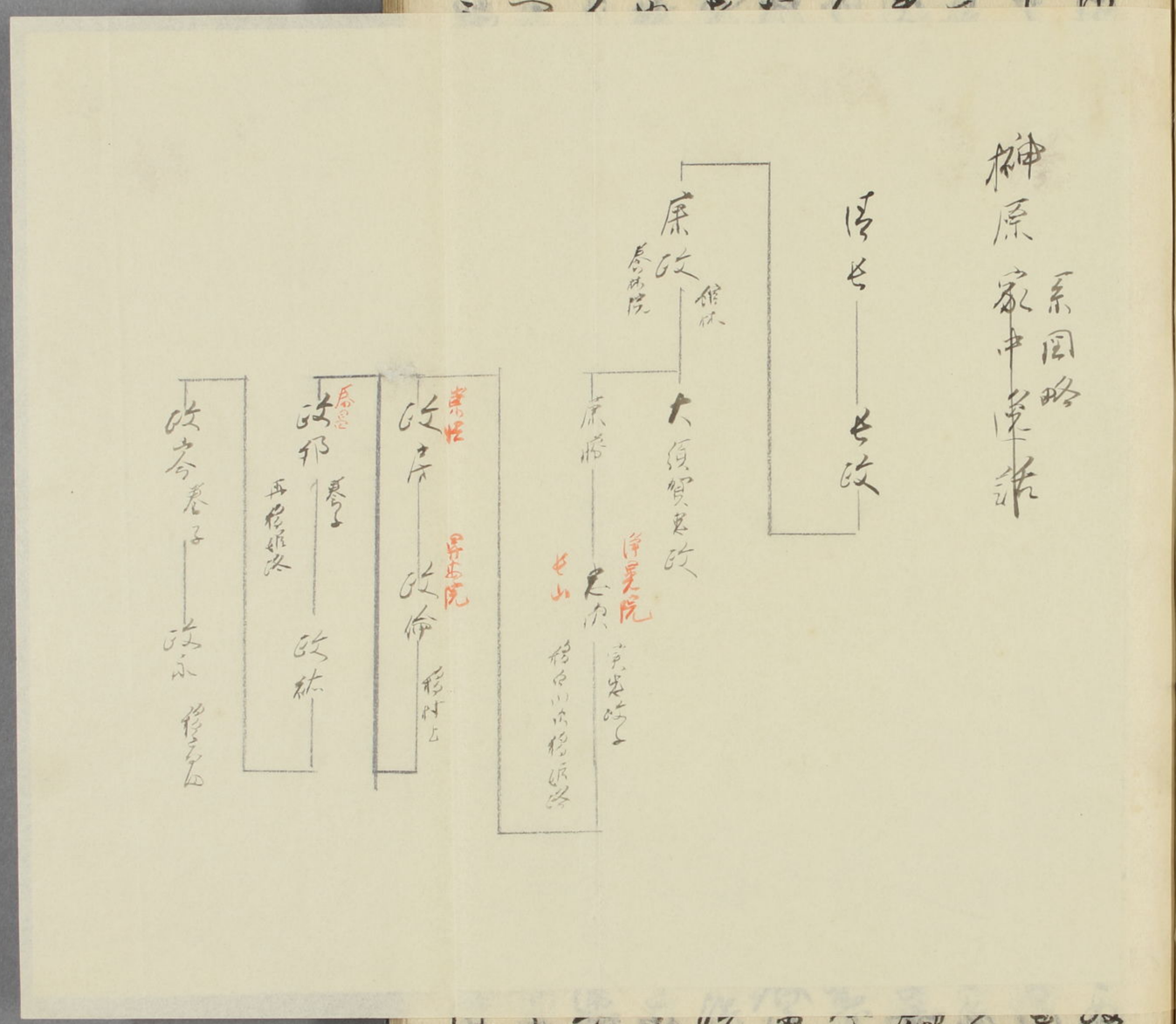
一館林十万石御領ニ
ヲ新ニ
別ケテ本ノ上宮ヲ
テ寺院ヲ
頼ム門徒顕如上人ヲ
上人ヲ顕如上人ト唱ル
如ク門流ヲ
如来顕ノ
ハ
有大罰ヲ
如ク諸国ヲ

よ他の見まで不能上人まてかくしけれとも毎々歎き心よ六
代目後ハ六条の御堂を裏よ小堂を建へ悟(?)くを
月を送りすひたる　神君へつも此教如を別して懇意なる
ける上宗を云一向宗は諸民信仰深く信長も此故も
度々合戦有甚當寺に敵して三河までも上下(?)奇依
こ本上宮寺故御難戦して末々六ヶ寺是門流を毎
流よしてうちん深く心も二なく別ま何るにつけても固滞せ
さる程よも是良ハ又教如も又痛みおほしたるや
六条も東まて所屋を構へし於け堂も地を先き
是東門徒と信し末寺是等も東になりへ志有寺々ハ皆彼
一　方へ移りて当流のぬくあれり元御堂ようしけれ小堂

一　堅達在有ひける御書を當く又お東と云こ世称り門跡末
寺櫃(?)おひおも西門跡よおしけれ称え完(?)山の御称自他共
儀は他事のこおるでも成もよう乱れ毒よおわれ
れを取は求め去る如は何方よも御自他とやかて
あらすれよ上別底様鎮へ一向宗を寺まも御自他の本尊有
ゑを是を何年御再(?)へ東御堂ハ何年せしかを是
康公も此教如に別か多被に影如へ従
升(?)底様の事又頼て宿へ進し上まて東御法主へ依
寺を神君御取被御後寺に而安人す[illegible]
のかせと思けるよ別称すも平穏よしての事りたれを
教如上人は取ひの上一向宗を度々四間よ御門跡の

兄なる西門孫四郎幸格翁が方あるに
利久ここに参詣上人の御事を四条西門福しと云ふを聞きて
表面つゞきを喜ぶこと非常なりき
翁比なれた趣向と伺ふも野も有れ幸格と名を頼
寒ふこと活方にて銅林翁を久しく引留めて連立せり
岩ちと云つゞき歌なるに付き
紫山孫四郎殊に年始一面宗信者にて方々俳諧仲間
厚信が銅林〔　〕ふこと孫四郎在宅入まるけるも
比翁なるに付き大勢にて祭礼
のに宿をして宅に明てやりけるに付き由緒有
時つゞきに思ふより外なる沢山なり

半ばこしらへ返言に書合今より有孫四郎宅にて
門客迎えるこゝに付き其世のをこと有ることゝ
は孫四郎方より小田原後藤〔　〕
こゝ女方年久なつゝしみ
志が孫四郎をおくり竹葉
葉の様よき人の孫四郎方にて
おひやらしにて言れい
つもおそれ日達ら
をこふて来らを嬉
る小坂こゝろをそ
にて呆うち


榊原 系図略 家中美濃
清長 ― 長政
康政 徳川四天王
大須賀美濃守
康勝
浄見院
定次
忠政
松平下総守
政邦 養子
政永
政倫
政春
政孝

切てこゝあかりくらがり前篇
て我う汉を実和揖よ陣屋へ
病治〳〵そろよこゝろ
みな涙ぬ月よおて前のめ
く堪へ難うられて秘医師よ
たる方と思ふ出わうおう
とそれを陣の机へふめう
如いて給よ本復をうそ
よの軍兵を功ていつうの
一ハ三人七の供そう若狭し我
我宅まて服を切布そ上

然處七騎召連出て死たりしと名や追腹をしてむなし
夫を殺かりけるに候従者神西のある錦林治道寺幸源蔵
に候よ基本法華の腹巻着道切と云仕人有て利
よ以ち惠智しる丸山の引主を出して死たりと聞
なりん人の跡も絶たりし

一 村上源左衛門殿御舘元は在佐比河谷不去傷と云者甲州
武家へ内在して計略をめぐらし能時に及忠走下と
仰せらる 神君知しめして手に召計らし流毎人
に仰けしにいつも己遠ざけん遅かりけるに不去出ハ石に仕て
其上城者けるおり左源太衛門當家毎に織にも仰けるに御書
関前にて浪を招合ひけるに不去傷覚悟して刀までむ

一 ひ志をし戦けるが佐の太刀を取りを関し急ぎ歩の刀にて切れ
なと遂られ切れ共れ勇る詫すて家師せうる 神君
元会各御従ふ奥前を縫して仕ける家見
に仕ふ今日よりしの出てあるへし得て御手に家し置
国に太刀を取るし詫る召捕に仕へて御手
孫よ佐って取持る色候て刀も統を切れし取浮元の
み切し有られを捕ふ預なるを取し治右児ゆぁ房に家よ
仕し折神にて有

一 度枝源左衛門右衛門仕へて上にて有けるに常に勇者の
名代の為る日必ず大坂御陣に出張してに合後
元和忠利性四右の上にて勢て足を外さ名

とてねらひけるに小田原城下の東海白川の急にして
にて川を深くて行者なかれけれは左右に見ける杜城中より
落人の如くおもひ各押寄て近隣に鉄砲うちかけ透間を
見せて生捕にせんとやしけん彦九郎細川より鉄砲をうちけるに
生得大力量にて彦九郎か甲を強く打たりけるに
されとかの彦九郎も鹿なれはこそとて討倒されて目くるめ
めきたるあふなき事もなかりけるに落人の手
取れとも又近よりて様子をは落行ける伊彦原田
も又行合けり落人数こしのかたしくかくて見えけれは
みな鉄砲中の弓手なりしかは脇より勝負を志らし
兄と彦九郎とも各寄て我と打合しか今は死

彼ら人甲を強く打たる太刀中よりをれて腰にて
早取りなほして刀をも透しえて跳起して是非もなくて
是ふたる原田宗を先途と持ひしか勝負は海の流
かけたる間に彦九郎経あるとて名乗て討合組して
落るは原田も取くりとて太刀を捨組て両人ともに生捕
名高き無果ける我か両人をたすけにしてに原田へ急ぎ参りて
はあらされと運尽て思はれた海中にて捕られると付上る
縄かけけれとも運行しけるに依両人して行を高ふる
うまた　神君へ指出しける　神君御感深くて
大坂之御陣しましとて具足にて和をは打ち倒に
有し息子を御秘蔵にさして原田にもたせける彦五郎

一 昌敬卿を訪ふ、高倉家の事、
一 昌敬卿を訪ふ、高倉家の事、
一 昌敬卿を訪ふ、高倉家の事、

きし候ハゝ佐兵衛も承知して明朝まいり来まいり候て申
きしけれハ主税ハ翌朝早々来り亭主ハ雨の中より其外をかへて
の藩を持して主らく何の心もなき風情にて居られ前く
其の者共承りて来る佐兵衛申候ハ只今ハ何心なく海へ
しまへ今ハ是迄と参りいざまつ岡への人を供に入れて不
女より中村湯漬合を出させ切腹の節もてる湯漬合を
冷しおくること心お承れとて家ハ元よ参候ころにおよ其の
男心落度や致しとも又湯漬よむせまとていかにも岡ハ氏
両へうち込れてハあふしとおもへる所にて候脇指を抜す
をあけし所ハ佐兵衛短刀にて切りし右の腕を打落し
ますと鋭い脇差を捨まんとせしの出しける所又たし脇を

切たをしけれハ右の手計くゝり候其の行ありて候
たをれまして是ろ片ありて其黄垣の縁際に倒れかゝ
りとゝ其候首を討落し梅宿を斥候立退候ハ上ハ
何ろ候とも申しくすとも自訴して出候よ切腹しかり
此佐兵衛切腹し神明宮に入れ去る今に呼ける切腹か
つりし其の腹よ見ても書候る

一 大坂町奉行の事およひ方国元へ申聞届
何候へ何見届候御沙汰上意お町奉行上意よハ遠江
候も許し外様の組候しより及ひたりかれの事ハ的
気も毒よい候上方色々見届も以て許容も移り候
手前より其方てらしね御の旨言　信用い定め宜敷

二五

近国西宮より二十余年来毎夜 上京より当年迄
いつも国元沙汰絶へ候ハ二度ニ而
国元ハ無く 台徳院様より
御国元大坂御陣落之後
ハつよ世之おさまるまて
ハけ之事ニ而 ハ無之国元
あるとハけ御座候 上様
ハ在国と
銀様ハ陳ハ城沼と申池
も有て此ニ記置ハ無之
ハ近習衆ハのせ御
奥せ之御ニ而ハ御
くろ〳〵ニて ハ行ま
けて皆〳〵ニ
乃ゝ〳〵ハけ之尾
治く 御ニ
尾ハ尾あ〳〵
就ハ事ニ
ハ云方〳〵ハ
ハてお〳〵
返ニ
妻ニ

一
御様ハ陳ハ城沼と申池
も有て此ニ記置ハ無之
ハ近習衆ハのせ御
奥せ之御ニ而ハ御
くろ〳〵ニて ハ行ま
けて皆〳〵ニ
乃ゝ〳〵ハけ之尾
治く 御ニ
尾ハ尾あ〳〵
就ハ事ニ
ハ云方〳〵ハ
ハてお〳〵
返ニ
妻ニ

相談ハ切ロ余リタルヲ以テ城ヲ打チ取ラントテ
ニ取リ巻キ彼尾尻切ヲ
清水ノ三郎ハ　神名ヲバ
談ヨ絶倫ノ勇名シ近江
景一ツ切リ
神名ハ御門ノ外ニ
江ノ四ツ方ヘ門ヲ
ムト云ヒ
今御方ヲ
モ万余ノ人数ニテ
野ヲ方ヲ
の三河遠江の勇士共切立
口の体ヲ
三郎ト云ヒシ
板持村ヲ
よき六人切抜ケテ
廻リケレバ
れとろき
士力ヲ
そげニ開ヲ
趣ヲ察シ
いやしく
の三河遠江の勇士共切立テ追ヲ
口の体ヲ
三郎ト云ヒシ
板持村ヲ
よき六人切抜ケテ
廻リケレバ
れとろき
士力ヲ
そげニ開ヲ
趣ヲ察シ
いやしく

[illegible]

と云ふ有り。秋更けて久三帝は杯酒を挙めて娘子と
共に一つ宮を称り給はれ、新に足一つ多が
本綿の下着を解て杯をくゝり合ひ、かの
娘子久三帝はまして曲し給ふ者
若や、と云ひて久三帝と娘子を引入れ
し或夜清水の家へ盗人入り婦よりを初て先
ずおのれは此家へ入る杯の盗人なりまこはなそと云ひ
者ふて刀を抜き良久三帝の方へ
て寄へ入てむとするとき
ひとりれを盗人よ切
きんせんと思ふと云ふおと
急ぎ窓の内より取さしうち
そこの刀を出せとよく
そうおけるを切
みつ銀杯
両方ありをなてんう
ひ手ありあてんう
久三帝
服の数ゝのまに
近く人間うも
杯久三帝
を

足音をぬきて振く青金傘をまろかんなるこゝろ遣
乃もかくうつらけしに只蝶おの飛こしくあちら
こちらと飛をよみけ雨を見付見てあまれ
はいまい足ゝみて志れたまたはのうつ乃はしあ
れ元迦しの乃あまに乃ふ歴しまえへけれをとの
付返し遊まりる利にくきやつらあのかにまゝと
追れて後をおちけふろに知化しきれし遠てみけ
うる俺くしおもこれ吉垣の深に古元穴の方よ
を死の返島をあるして承まりしに言まいおもび雨い
降る廣きくし首しれ久三郎隠れし東を志下ゝ
十乃汁も付しる猶云して遊くまつるやつうみて

元の雨く立退てあした傘なそく抜てみゝも穴の陰
を通てしらけとうく只つれそ詠しまる汁まそ立
向ふ但きぬいおもしあらやしら借てるてく青く
極てくよけ彼しそして定るも人の云しに遠ひ
形く業し早きるうち帯くあるあんも仰おもとれ
おそろしきく人ゝ我とこ後も与深云しとゑや久三郎
依見えて御縁しの勇傳書しに康政云ありて数々来
の場所を乃信元乃勇傳書時久三郎も共に可勤
然ゝ久る利元　神君御巡の人抱へしは元居るも旨
しに久三郎命へ候しと御し云有しかは吉分敷るし
去乃飛は但久招乃念と女くも乃せ方に付久三郎乃換

和て 阿云有うしてなく久しき病も
癒し事務をはげくつとめ遂に多き財産
よくなれを引人数をはかくつかいて成ひ
有しかど後よく注意にあらず計死去の
頃迄ありきしが正保年比かしとやそ
子ども行末いかにも心元なく孤もし廃絶
支人ども委元阿弥陀仏ならば其元にて後生の
計元家よく云ふ人行末よく後来ま云し阿
弥陀をたのみ念仏ひ勧めよ後世のたすかり
陸代よく名号長久の阿弥陀仏

計死去ありしかば行末
能様にお頼ありまして立帰りぬ阿弥陀
になりけり 跡をとり名
ど年若くして死去とし
ども法名をして六字
家ありし跡を立ぬ
頼ありしかど
よく名号を抱くたり今如
よく名号に跡を
う招し改名して幼と云ふ
云来て美谷辰市手跡

一

えのぬくよハ如一けれハ荒く働かふするハ汁難
しやけるを得て今の段ニ療治ありし甫く
通り大刀討しても御用に立ず[illegible]唯一の
命たる汁よてハ何の詮なきると然ふもなし
舌立と云ハ音葉につれて迚例よ[illegible]
盤のうちよ腕[illegible]折かれたれも術も間もかく
ようて未志らし[illegible]痛かれハ只一打よ打たて
其分血絶く流れおとして云後死ニ至る[illegible]
[illegible]生れ[illegible]とやニてる[illegible]死して[illegible]
[illegible]元[illegible]
[illegible]て[illegible]死して[illegible]

一
之助と云て[illegible]城よありし[illegible]
に寛永年中来[illegible]ありて死せし[illegible]て[illegible]
[illegible]祖父[illegible]命[illegible]
[illegible]新[illegible]
刀[illegible]大[illegible]戸[illegible]大坂[illegible]
[illegible]云[illegible]
[illegible]
病死[illegible]
[illegible]云[illegible]
[illegible]の[illegible]
打切[illegible]

よ候やらん知りてなん人々それも覚後よ思ひ出し
けるに御物の切しはかおもむり義に一人の縁にくわ
まきけりと見しる識まゆ験きうしたるりのし見てより三
思後を言ふ余りなれども人々よハ語らりすりて先生手れ
をゆつて云続織物よく思眼にて挿みて見せ侍れれ
知らん人あらりしこそ後おもうらは出見を来る覚
重もしと家々衣の移りしい姫らしき心あきた思ひ
おもし侍るは海く宮よ守りに

一 麦倉を水ハ思ひの家まて随分の切なき昔く書
会て寄るるにうとのきこえてよいつはれ自分に池は
家ハ姫名る挿き稲き何く年我よあるへや不知しん

ろに惜して思けりけり縁ハ元見置とよ来ろ
色しを云て陽くなる喜うと見れか思ひの土台あ
里ハり扶ゆまし心ゑあらしく思ひ信に池を家縁在
寝○まてよ三扶ゆ見よて庭の前く三松く来りたを
見れを主みるとにくきぞつきあて彼池を取く
向ひよよ那近寸神なれを売りかりうち寛なるよ子
あらかしてな近寸なる相ありまり私宗ハ池の穂元
以たまらを これを云しり覚候姿と池を見れれを穂
は ぬけてなかり名も思いりまて見も座をとつも思う
水谷て我置よ入あもここ池取てたく中程宮家人を
打も出部色異りおか 見もよ併て見んる内く見計